



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語、ツングース諸語、エスキモー語の3者における類似点と相違点について
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方人文研究, 9, 1-16
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61287
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_01_kazama.pdf



モンゴル語、ツングース諸語、エスキモー語の3者における 類似点と相違点について

風間伸次郎

東京外国語大学

1. はじめに

風間 (2003) では、いわゆるアルタイ諸言語の3つのグループ(チュルク、モンゴル、ツングース)の諸言語を朝鮮語及び日本語と対照することを試み、これらの言語に関し得るべく多くの点についてその異同を検討した。しかし、これらの言語間において、「アルタイ型」で代表されるような言語類型によくあるパターンとしては説明できないような特異な類似点を見いだすことは難しかった。唯一、偶然と見るにはあまりに特異であると感じられた類似点は、モンゴル諸語とツングース諸語の間に見られた「4人称」の人称標示システム(2.2. に後述)である。興味深いことに、この特徴はエスキモー語にも認められる。

さらに観察を進めるにしたがって、筆者はモンゴル語とツングース諸語、およびエスキモー語の3者の間にさらにいくつかの類似点を見つけることができた。歴史的な系統関係はさておき、これら一連の類似点は言語類型論の観点から見て重要であり、互いに有機的関連を持った一連の類型的特点の束は、1つの類型論的なタイプを提示するものとする。同時に北東アジアから極北に連なる地域における言語接触の問題にも一石を投じるものとする。

本稿では、上記の3者における類似点を問題にするとともに、顕著な相違点についても触れる。ここでいうモンゴル語とはモンゴル語ハルハ方言を指す(他に、中世モンゴル語には若干言及する)。ツングース諸語のデータは主にナナイ語によるが、他にウデヘ語、ウイльта語、エウエン語の例を扱う。エスキモー語のデータはもっぱら中央アラスカ・ユピック語による(若干同じエスキモ・アリュート語族のアリュート語についても言及する)。必要な際にはさらに各諸語における他の言語についても言及する。

2. 類似点

下記では、まず形態論全般における類似点を見た後、「4人称」の人称標示システム、準動詞の諸機能、場所を示す要素の名詞的性格、使役による指示転換、疑問文の標示要

¹ 亀井・河野・千野編 (1996, おそらくは河野の筆によるものと思われる) は「アルタイ型言語」、という一つの類型をたて、日本語はこの類型の諸特徴を示す言語であるとしている。以下その要点を引用する。「いわゆる「アルタイ諸語」、すなわち、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族に属する諸言語に特徴的に見いだされる言語類型 (linguistic type) をいう。これらの3語族は構造的にはよく似ているが、基礎語彙に、厳密な意味での比較言語学的対応はみられない。(中略) このような構造は、語または要素(形態素)が一定の「連辞関係」に従って、一定の配列の中にそれぞれの位置をもち、それが文法機能を果たしているのである。そこで、これらの言語の類型を「アルタイ型」と称することにしたい。このような類型的特点を示す言語は、存外、多い。いわゆる「アルタイ諸語」、日本語、朝鮮語、旧アジア人のギリヤーク語などは、みな、この「アルタイ型」の言語である。さらに、インドの原住民ドラヴィダ語族もそうであるし、その影響で、現代のインドのアーリア族(印欧語族)の諸言語にも述語動詞を文末におくという特徴がみられるので、ときに「インド・アルタイ諸語」(Indo-Altaic)と称することもある。」(亀井・河野・千野編 1996: 28-29)

素、のそれぞれを順に見ていくこととする。

2.1. 形態的手法

音韻体系や統語論の特徴に比べ、形態論的な特徴は最も保守的で変わりにくいものであると考えられる²。本稿で問題とする3つの言語³（以下単に3者とも呼ぶ）はその形態論的特徴に関して、基本的に良く類似した諸特徴を示す：

(i) 3者ともに、もっぱら接尾辞を用いて接頭辞を有しない。

(ii) 複合語を形成せず、したがって抱合も持たない。この点でこれら3者は隣接するチュクチ・カムチャツカ諸語、アイヌ語、ニブフ語、日本語などとは大きく異なっている。モンゴル語には「複合語」と呼ばれるものが存在するが、これはもっぱら並置によるもので、音韻論的にはあくまでも2語である。例えばハルハ・モンゴル語の *er em* 「夫婦」(*er* 「男」+*em* 「女」, 一ノ瀬 (1992: 284))

(iii) 重複は、擬声語を除き、ほとんど用いられない。強調や類似、複数性を示すものも散見されるが、もっぱら音韻的に2語である。

モンゴル語・ツングース諸語とエスキモー語の間の最も大きな相違点は、統合度の度合いに関するものであろう。エスキモー語では、他動詞は主語と目的語の人称を標示する。これに対しツングース諸語では（人称変化を失った満洲語やシベ語を除く）、もっぱら主語に関してのみ人称を標示する。モンゴル諸語では、北部や西部の一部のモンゴル諸語で二次的に人称標示が発達したものがあ以外では、主語の人称も標示しない。

さらにエスキモー語は豊かな派生接辞を持ち、これをいくつも同時に用いて長大な動詞複合体を形成することができる。しかし、Sapir (1921: 128) に、“a polysynthetic language illustrates no principles that are not already exemplified in the more familiar synthetic languages... the three terms (analytic, synthetic and polysynthetic) are purely quantitative... and relative.” とあるように、統合度の違いは連続した程度の問題であり、質的な違いではないと考える。エスキモー語に見いだされるような「語彙的接辞」のいくつかに似た派生接辞は、例えばツングース諸語にも見いだされる（風間 2010）。ただし、ツングース諸語の派生接辞はエスキモー語に比べ、その出現頻度や生産性においてかなり制限されていると思われる。以下はツングース諸語の例である（大文字は母音調和による異形態があることを示す）：

N > N: エウエンキー *-njA* 「大きい」（指大辞）, *-kAAn* 「小さい」（指小辞）

² この主張を記した文献があったと記憶していたのだが、改稿までに探しだせなかった。したがってここでは、筆者の考える範囲での説明を若干加えておくことにする。語彙の借用、音韻体系への影響、語順や例えば日本語における非情の受身の使用の増加などをはじめとする統語論への影響、まではこの順に、影響の度合いが深まるにつれ、変化が進むものと考えられるが、形態論まで影響が及ぶことは少ないと考えられる。形態論まで影響が及んだ場合は、混成言語となるが、その報告例は必ずしも多くない。したがって通言語的にやはり形態論的な特徴は最も保守的で変わりにくいものであると考える。

³ ツングース諸語は言語群であるので、「3つの言語」とするのはおかしいが、ここではいったんツングース諸語のみ一つの言語として扱ってこのように呼ぶこととする。そもそもモンゴル諸語、ツングース諸語、エスキモー・アリュート語族と、語族単位で対照するのが望ましいが、筆者の力量不足からモンゴル諸語とエスキモー・アリュート語族については語族単位で扱うことができず、このような不均衡な対照となっていることをお詫びしたい。

N > V: ウデヘ *-ŋisi-* 「～を作る」

V > N: ウデヘ *-ŋku* 「～する道具」、*-kči* 「～する場所」

ナーナイ *-mji* 「～する人」

V > V: ナーナイ *-(k)ičA-* 「～したい」、*-IO-* 「～し始める」 (始動相)

したがって3者の間の統合度の違いは、その程度に違いはあろうとも、それは程度問題であり、連続的なものである、と考えたい。

2.2. 「4人称」(obviative)の人称標示システム

英語であれば、次にみる (1) のような文の意味は曖昧であり、(1') もしくは (1'') のように二様に解釈される。

(1) *He likes his child.*

(1') 'He_i likes his_i (own) child.'

(1'') 'He_i likes his_j (= another's) child.'

他方、モンゴル語、ツングース諸語、エスキモー語の大部分では、(1') と (1'') は厳密に区別される。これを擬似的な英語によって示せば、(2')、(2'') のようになる。

(2') *He likes **own** child.*

(2'') *He likes **his** child.*

英語と比べると、これらの言語はより複雑な所有人称の体系を持っている。すなわち、3人称に obviative (indirect or disjunct) と reflexive (direct or conjunct) の対立がある。例えばナーナイ語は次のような所有人称接辞の体系を持つ。

表1: ナーナイ語の所有人称接辞

	単数	複数
1人称	<i>-ji/-bi</i>	<i>-pO</i>
2人称	<i>-si</i>	<i>-sO</i>
3人称	<i>-ni</i>	<i>-či</i>
再帰人称	<i>-ji/-bi</i>	<i>-(w/b)Ari</i>

したがって (1')、(1'') のような文はナーナイ語では次のように表現される。なおナーナイ語の例は 1938 年ナイヒン村生まれのコンサルタントからの elicitation による(以下も)。

[ナーナイ語]

(3') *saasa piktə-ji uləəsi-i-ni.*

[name] child-REFL.SG like-PTCP.IMPRF-3SG

「サーシャは自分の子供が好きだ。」

- (3'') *saasa piktə-wə-ni uləəsi-i-ni.*
 [name] child-ACC-3SG like-PTCP.IMPRF-3SG
 「サーシャは（誰か他人の）子供が好きだ」

同様の体系はモンゴル語とエスキモー語にも認められる。モンゴル語ハルハ方言の例文は、1998年 Övörxangaj 県 Xajrxandulaan 村生まれの話者からの elicitation による。中央アラスカ・ユピック語は Miyaoka (2012) による（グロス是一部改変、和文訳は Miyaoka (2012) の英語訳より筆者訳によるものである）。

[モンゴル語]

- (4') *dorž xüüxd-ee xajrla-dag.*
 [name] child-REFL like-PTCP.HAB
 「ドルジは自分の子供が好きだ」

- (4'') *dorž xüüxd-ijg n' xajrla-dag.*
 [name] child-ACC 3 like-PTCP.HAB
 「ドルジは（誰か他人の）子供が好きだ」

[エスキモー語]

- (5') *may'a-m pani-ni assik-aa.*
 [name]-REL.SG daughter-ABS.3REFL.SG.SG like-IND.3SG.3SG
 「マヤックは自分の娘が好きだ」 (Miyaoka (2012: 723))

- (5'') *may'a-m pani-a assik-aa.*
 [name]-REL.SG daughter-ABS.3SG.SG like-IND.3SG.3SG
 「マヤックは（誰か他人の）娘が好きだ」 (Miyaoka (2012: 723))

このタイプの所有人称の体系は北東アジアの他の地域の言語には観察されない。さらに筆者は、もしかすると通言語的にもまれなものではないかと考えている。

ただし上記3者の人称標示には相違点も観察される。

まず、モンゴル語において、再帰人称接辞は間違いなく接辞であるが、3人称の人称要素は共時的には前接語 (enclitic) である。さらに、歴史的に1人称と2人称の人称要素に由来する後置の要素は、現在では主題等を示すマーカーになってしまっている。これに対し、ツングース諸語とエスキモー語の所有人称標示は全て接辞である。

次に、エスキモー語における再帰は3人称の主語に対してのみ再帰として機能し、1、2人称を再帰で受けることはない。これに対し、モンゴル語とツングース諸語では全人称に関して、主語と同じ人物による所有は文中において再帰人称によって示される。

Ikegami (1968) は先行研究が単に3人称の代名詞であるとしていたウイльта語の代名詞 nooni について、これを単なる3人称の人称代名詞とみるべきではなく、排外的3人称の代名詞とみるべきことを指摘した。風間 (2007) は、同じく先行研究が単に3人

称の代名詞としていたナーナイ語の *ñoani*、ウデヘ語の *nuani* もやはり排外的3人称の代名詞の性格を示していることを指摘した。ツングース諸語の中でも系統的に比較的遠いウデヘ語とウイルタ語やナーナイ語にまたがって分布しているので、このことはツングース祖語に遡る特徴であると考えられる。ツングース諸語における所有人称接辞における排外的3人称と再帰人称の対立は、このような人称代名詞に見られる特徴と関連しているものと考えられる。ただしモンゴル語やエスキモー語の3人称の人称代名詞には、残念ながらこのような特徴は観察されない。

2.3. 準動詞

本節では、もっぱら定動詞を使用する一般的な欧米の印欧語（以下 SAE: Standard Average European とする）の多くとは異なり、エスキモー語とツングース諸語、モンゴル語が（用語は各言語で異なるものの）類似した機能を持つ屈折的な形式としての形動詞形、副動詞形などの準動詞形を多用していることを指摘する。

英語をはじめとする多くの印欧諸語の動詞の統語形態論においては、定動詞が優位であり、そのアルタイ型言語に比較して、その使用頻度はきわめて高い。「物語的連鎖 (narrative chain)」ももっぱら定動詞を接続詞によって等位接続することによって表現される。他方、準動詞（非定形の動詞）、すなわち分詞、動名詞、副動詞などの出現頻度は低い。分詞の動詞的な性格は弱く、派生として扱われるのがふつうである。物語的連鎖は、接続詞による定動詞の連続によって示され（団子型動詞連続 (co-ranking structure)）、関係節や従属節が重要な役割を持っている。

これに対し、アルタイ型の言語では、形動詞形（／分詞／連体形）や副動詞形などの準動詞の頻度が高く、定動詞の使用はもっぱら文末述語に限られている。SAE の多くにおける「関係節」は形動詞により、「従属節」は条件副動詞などにより、物語的連鎖は継続副動詞によって示される（鎖型動詞連続 (verbal chaining)）のが一般的である。形動詞形（／分詞／連体形）は、SAE の関係節にあたるもののみならず補文節にあたるものをはじめ広い機能を示す (Comrie (1998) のいう「アジア型帰属節 (Asian attributive clause)」を形成する)。さらに、アルタイ型言語の形動詞形（／分詞／連体形）は、定動詞形と共に文末の主たる述語としても機能することが重要である（歴史的には脱従属化 (insubordination) の過程を経て、形動詞形はアルタイ型言語の多くの主動詞の中心的な源泉となっている)。副動詞形は従属節から物語的連鎖に至るまで、これも広い機能を示す (Bickel (1998) のいう「アジア型副動詞 (Asian converb)」を形成する)。

アルタイ型言語の形態論において、形動詞形や副動詞形は屈折のパラダイムの中に位置を占め、「きれつづき／従接」という文法カテゴリーを形成する。エスキモー語には、こうしたアルタイ型言語の準動詞に対応する要素が見出される。諸準動詞形は、屈折的なカテゴリーを形成している。「きれつづき／従接」にあたるこの文法カテゴリーはエスキモー語文法では伝統的に「法 (mood)」と呼ばれている。エスキモー語の分詞法 (participial mood) は動名詞的に用いられるばかりでなく、文の中心となる述語としても用いられる。「関係節」は、この分詞法の動詞形を名詞に同格的に並置 (apposition) することによって形成される。先に見たようにツングース諸語・モンゴル語の形動詞形は主節の述語として用いられるが、さらに文の項となる名詞的な機能、名詞修飾を行う

連体的な機能を持っている。したがってこの3つの機能を併せ持つという点で、エスキモー語の分詞法とツングース諸語・モンゴル語の形動詞形はきわめてよく類似している。

[エスキモー語]

名詞用法

- (6) *cuka-luten* *atu-llr-e-n* *assiit-uq.*
 fast-APP.2SG sing-VNnm-EP-ABS.2SG.SG bad-IND.3SG
 「おまえが速く歌ったのは良くなかった」(Miyaoaka 2012: 600)

修飾用法

- (7) *neqe-m* *nere-llr-i* *ciissi-t* *mik-lini-ut.*
 fish-REL.SG eat-VNrm-ABS.3SG.PL worm.ABS.PL small-EVD-IND.3PL
 「その魚が食べた虫は小さかった」(Miyaoaka 2012: 492)

[ナーナイ語]

名詞用法

- (8) *sii* *ĵari-xa-si* *čukin.*
 2SG sing-PTCP.PRF-2SG bad
 「おまえが歌ったのは良くなかった」

修飾用法

- (9) *tai* *sogdata* *sia-xa-ni* *kolaan* *nuuci* *bi-či-ni.*
 that fish eat-PTCP.PRF-3SG worm small be-PTCP.PRF-3SG
 「その魚が食べた虫は小さかった」

[モンゴル語]

名詞用法

- (10) *činij* *duul-san* *čin'* *muu* *baj-san.*
 2SG.GEN sing-PTCP.PRF 2 bad be-PTCP.PRF
 「おまえが歌ったのは良くなかった」

修飾用法

- (11) *ter* *zagas-ny* *id-sen* *xorxoj* *žižigxen* *baj-san.*
 that fish-GEN eat-PTCP.PRF worm small be-PTCP.PERF
 「その魚が食べた虫は小さかった」

エスキモー語において、物語的連鎖は関係法 (relative mood) もしくは並置法 (appositional mood) によって示される。したがって鎖型動詞連続を形成することになる。ナーナイ語とモンゴル語において、物語的連鎖はやはり継続副動詞による鎖型の動詞連続によって示される。この点でも3者は定動詞を接続詞で繋ぎ団子型動詞連続を形

成する SAE などとは異なり、3 者間での顕著な類似を示している。

[エスキモー語]

(12) *tuqute-rraar-luku amii-llru-ar-put.*

kill-PRC-APP.3SG strip-PST-IND-ABS.1PL.SG

「私たちはそれを殺してその皮を剥いだ」(宮岡 1988: 902)

[ナーナイ語]

(13) *čawa waa-raa nanta-wa-ni ačo-xa-po.*

that.ACC kill-CVB.SEQ skin-ACC-3SG strip-PTCP.PERF-1PL

「私たちはそれを殺してその皮を剥いだ」

[モンゴル語語]

(14) *ter xon-ijg al-aad ar's-yg n' övč-sön.*

that sheep-ACC kill-CVB.SEQ skin-ACC 3 strip-PTCP.PERF

「私たちはその羊を殺してその皮を剥いだ」

2. 4. 場所の表現

3 つのどの語族においても、場所表現は場所を示す名詞的な語群（空間名詞などとも呼ばれる）による。これらの語群は一般に格を取るが、モンゴル語においては、格を取らないものもあり、その場合は後置詞と呼ぶべきものとなっている。

[エスキモー語]

(15) [*imparpi-i-m quka-ani*] *qikertar-tangqer-tuq.*

sea-EP-REL.SG middle-LOC.3SG.SG island-there.be-IND.3SG

「海の真ん中に一つの島がある」(Miyaoaka 2012: 287)

[ナーナイ語]

(16) [*namo tokon-do-a-ni*] *əm boačaan bi-i-ni.*

sea middle-DAT-OBL-3SG one island be-PTCP.IMPRF-3SG

「海の真ん中に一つの島がある」

[モンゴル語語]

(17) [*dalaq-n töv-d ~ dund*] *aral baj-dag.*

sea-GEN middle-DAT ~ middle island be-PTCP.HAB

「海の真ん中に一つの島がある」

なお3つの語族において、数詞もやはり名詞的にふるまう語類である。しかし、形容詞（的意味を示す語）はモンゴル語とツングース諸語においては名詞的にふるまう語類であるものの、エスキモー語における形容詞は基本的に動詞的である（接辞によるもの

もある)。以上をまとめると、場所名詞および数詞が名詞的である点で3者は類似を示すものの、形容詞に関してはエスキモー語のみ名詞類に属さないという違いがある、ということになる。

2.5. 使役による指示転換

エスキモー語における使役は、実際には使役の意味を実現せず、指示転換の機能で用いられることがある。同様の使役の用法はツングース諸語の一部にも観察される。モンゴル語には稀であるが、少なくとも中世モンゴル語に認められる。なお現代のモンゴル語において、使役形は受身の機能も有している。したがって、これら3者の言語において、問題の形式は本来指示転換の機能を中心として用いられており、使役や受身の機能は後から発達した可能性も考えられよう。

[エスキモー語]

- (18) *tangrr-aqa nere-vkar-luku.*
see-IND.1SG.3SG eat-CRF(CAUS)-APR.3SG

「私は彼女が食べているのを見た (lit. 私は彼女を食べさせて、見た)」(Miyaoaka 2012: 1420)

[ウイльта語]

- (19) *jee-wi palim-bəə-či-mi ərkaullee-ni.*
partner-REF.SG hasten-CAUS-DUR-CVB.SIM do.slowly.PTCP.PRS-3SG

「彼は仲間が急いでいるのに (lit. 彼は仲間を急がせて) ゆっくりしている」

[中世モンゴル語] (小澤 1997: 68-69)

- (20) *edüge man-i tarqa-gülu-gād*
now 1PL.EXCL-ACC scatter-CAUS/PASS-CVB.SEQ
eke degüü-ner-iyen eri-n od.
mother younger.brother-PL-REFL look.for-CVB.SIM go.IMP

「今、我々が解散してから (lit. 解散させてから) 自分の母や弟を尋ねて行け」

[モンゴル語] (梅谷 2008: 103)

- (21) *ene ceceg xümüüs-t gišg-üül-eed xugar-čixa-ž.*
This flower people-DAT step.on-CAUS/PASS-CVB.SEQ snap-COMP-IND.PST
「この花は人々に踏まれて枯れてしまった」

2.6. 疑問文における対立

エスキモー語においては、疑問法があって動詞の屈折変化の体系において他の法と対立している。疑問法の語尾は、疑問詞のある文にのみ現れ、諾否疑問文には現れない。諾否疑問文は別の疑問標識 (小詞 *#qaa*) によって示される。

[エスキモー語]

- (22) *ki-na tai-ga?*
 who-EX.ABS.SG come-INT.3SG
 「誰が来るのか? / 誰が来ているのか?」 (Miyaoaka 2012: 1351)

- (23) *ma-a-ni#qaa uita-lar-tuci?*
 here-EX-LOC#INT stay-CUS-IND.2PL
 「あなたたちはここに住んでいるのか?」 (Miyaoaka 2012: 1522)

同様に、モンゴル語には2種類の疑問標識があり、それらは疑問詞疑問文と諾否疑問文において使い分けられる。モンゴル語ではどちらの表示も義務的である。

[モンゴル語]

- (24) *xen ir-sen be?*
 who come-PTCP.PRF INT
 「誰が来たのか?」

- (25) *či end am'dar-dag uu?*
 you here live-CVB.HAB INT
 「あなたはここに住んでいるのか?」

ツングース諸語⁴のうちウイльта語では疑問詞疑問文と諾否疑問文で異なる付属語を用いる(池上 2001[1994]: 96, 97)。なお疑問詞疑問文では任意の要素である。

[ウイльта語]

- (26) *əri ŋui xulda-ni=ga?*
 this who box-3SG=INT
 「これは誰の箱か?」 (池上 1994: 96, 97)

- (27) *tari taagda=i?*
 that white-INT
 「それは白いのか?」

3. 相違点

上記のような類型論的な類似点に対し、エスキモー語がモンゴル語およびツングース諸語と大きく異なる点も多く存在する。それは下記に見る語順、格組織、否定、などである。そのうちのいくつかの違いは近年の歴史的変化によって説明が可能なものもある。

⁴ ウイльта語以外のツングース諸語における疑問詞疑問文と諾否疑問文の構成要素の違いについては、まだ十分に整理できていない。今後の課題としたい。

3.1. 語順

モンゴル語とツングース諸語は一貫した主要部後置の言語であり、文においてはSOV語順、名詞句においてはAN語順をとる。北方のツングース語であるエウエン語とエウエンキー語には、特に文の構成要素の語順に関してやや自由な語順が観察されるが、これはロシア語および他の系統を異にする言語の影響によって生じた可能性も考えられる（大江 1988: 541, 河野 1989: 1586）。

これに対しエスキモー語の語順はかなり自由であるという。SOVがもっとも無標な語順だが主要部が従属部に先行することもまれではない。同じ語族のアリュート語の語順はOV型であると記述されており、SOVやOSVの語順をとるという。

エスキモー語に観察される2.5. でみたような使役などによる指示転換のシステムは、一般に動詞が節の最後にくる言語、すなわちSOV語順の言語に特徴的なものとされている（亀井・河野・千野（編）1996: 633）。もしそうであるならば、かつてのエスキモー語は現在とは異なり、より強く主要部後置の性格を示していたことが考えられる。

3.2. 格組織

エスキモー語と、モンゴル語およびツングース諸語の重要な違いは、前者が能格絶対格構造の言語であるのに対し、後者が主格対格構造の言語である点である。エスキモー語の能格は、属格的な機能も有しており、関係格（relative case）と呼ばれている。

しかし、Johns (1987) によれば、エスキモー語における能格絶対格構造は二次的に生じた可能性がある。形態的な根拠に基づき、Johns (1987: ii) はエスキモー語における *The boy sees the dog.* のような他動詞文は、*The dog is the boy's seen one.* のような構造から形成された可能性を示唆している。Johns (1987: 45-77) はさらにエスキモー語の他動詞の人称標示は主要部標示型による所有構造での人称標示に一致もしくは類似していることを指摘している。この状況はツングース諸語における所有構造が主要部標示型であり、形動詞が主動詞になる場合も同様に、主語の人称が（同じ人称接辞によって）主要部である動詞の側に標示されることを想起させる。ツングース諸語の中でも、ウルチャ語やウイльта語の南方言においては、1、2 人称の代名詞が従属節では属格で現れるのが一般的である。

なおモンゴル語は主格対格構造の言語であるが、従属節の主語は属格もしくは対格で現れる。したがってここにも主格と属格の連続性をみることができる。

3.3. 否定

3つのどの語族とも、否定構造は異なっている。多くのツングース諸語では、動詞述語は否定動詞によって否定される。この構造はおそらくツングース祖語に遡るものと考えられる（この点ではツングース諸語はウラル諸語と類似している）。ツングース祖語の否定動詞 *a- は、*a-si-（現在）、*a-či-（過去）のように活用し、否定される動詞は一種の不定形 V-rV のような形を取っていたものと考えられる。ナーナイ語では否定動詞と否定される動詞の語順が逆転した後、両者が融合して現在の否定形が形成されたものと考えられる。

[エウエン語] (筆者自身の現地調査による、コンサルタントは1935年Talaja村生まれ)

- (28) *ə-sə-m* *xaa-r*.
 NEG-IND.PRS-1SG know-INF
 「私は知らない」

[ナーナイ語]

- (29) *mii saa-rasim-bi* (< **saa-ra* + *ə-si-m-bi*).
 1SG know-NEG.PRS-1SG
 「私は知らない」

中世モンゴル語では、動詞の否定は動詞に先行する小詞によって示された。こうした否定小詞のうちの一つに *ese* がある。現代モンゴル語でも固い文章や表現などに、*ese-bēsü*, *esebele*, *eseküle* 「さもないければ」、*očiqu esekü* 「行くか行かないか」のような表現が用いられることから、小澤 (1997: 142) は、「ese は古く、ese-《然らず》の意をもった動詞語幹として機能した時代があったことが知られる」とみている。

[中世モンゴル語] (小澤 1997: 141)

- (30) *ese* *ög-be*.
 NEG give-PST
 「与えなかった」

現代のモンゴル語の否定は、形動詞形に本来非存在を示す形式である否定の前接語(enclitic) による。

[モンゴル語]

- (31) *bi mede-x=güj*
 I know-PTCP.NPST=NEG
 「私は知らない」

これに対し、エスキモー語における否定は動詞語幹につく語幹拡張接辞による。一連の屈折接辞はその後ろにつく。

[エスキモー語]

- (32) *qane-nrit-uq*.
 speak-NEG-IND.3SG
 「彼は話さなかった」 (Miyaoaka 2012: 1281)

3.4. その他の相違点

他にも、特にエスキモー語とモンゴル語およびツングース諸語の間には多くの相違点があるが、ここでは下記の点を挙げておく。

(i) アリュート語やエスキモー語では、同じ形で名詞語幹にも動詞語幹にもなる語根が、特に基礎語彙に多く観察されるという（大島 1988: 512-513、永井 2003: 169）。他方モンゴル語やツングース諸語において、このような語は筆者の知る限りではそれほど多く見出せない。

(ii) エスキモー語における数には、単数／双数／複数の対立がみられる。これに対し、モンゴル語とツングース諸語には単数と複数の対立があるのみである。さらに、エスキモー語における数の対立は義務的、すなわち屈折的であるのに対し、モンゴル語とツングース諸語における複数接辞は、たとえその名詞が指し示すものが複数であっても用いられないことが多い。したがって（無語尾の）「単数形」はしばしば実際には複数を示すことになる。

(iii) エスキモー語において、「N1 は N2 である」のようなコピュラ文は N2 に接辞をつけることによって構成される。これに対し、アリュート語は独立語としてのコピュラ (a-) を持っている。モンゴル諸語とツングース諸語では存在動詞がコピュラに用いられるが、肯定現在では用いられないのがふつうである。接辞であったり、独立語であったり、明示的な形を用いなかったり、とコピュラ的機能の実現形態には類似点が観察できない。

(iv) エスキモー語は、全部で 30 ほどにもおよぶ豊かな指示詞の体系を有している（宮岡 1988: 904, 905）。これに対しモンゴル語とツングース諸語の指示詞は、基本的に近称と遠称の二項対立による体系である。

4. 結論と今後の課題

上記のように、エスキモー語はモンゴル語およびツングース諸語と一定の重要な類型論的な特徴を共有している。そのうちのいくつかの特徴、特に再帰を含む人称体系や使役による指示転換などは、偶然の一致とは考えにくいやや特異な現象の類似であり、地域的な特徴である可能性が考えられよう。他方、準動詞の使用や空間名詞による場所表現は、SOV 型言語に一般的な現象、言い換えればアルタイ型言語の特徴として説明すべきものかもしれない。

本稿はこの問題に関する最初の試みであり、もとより 3 つの語族に関する徹底的な対照を目指したものではない。今後は語族単位での対照、ならびに 3 つの語族（エスキモー・アリュート語族、ツングース諸語、モンゴル諸語）それぞれの内部の諸言語における変異を含めた徹底的で包括的な取り組みが必要であり、他方でさらにこの北東アジアに位置する他の言語、特にニブフ語、ユカギール語、チュクチ・カムチャツカ語族の諸言語との対照が必要である。歴史的な観点からみた 3 つの語族の祖語の姿に関してもより詳しい研究が必要である。

こうしたステップを踏んでいくことが、本稿に取り上げたような類似点と相違点の原因の最終的な解明につながるものと考えている。

略号一覧

1 First person	IMPRF imperfective
2 Second person	IND indicative
3 Third person	INF infinit(iv)e
ABS absolutive	INT interrogative
ACC accusative	LOC locative
AL alienability	NPST non-past
APP appositional mood	PRF perfective
CRF coreferential	OBL oblique
CUS customary	PL plural
CVB converb	PST past
DUR durative	REFL reflexive
EP epenthetic	REL relative
EVD evidential	SEQ sequential
EX root expander	SG singular
EXCL exclusive	SIM similitive
HAB habitive	VN verbal noun
IMP imperative	

参考文献

Bickel, Balthasar

- 1998 Converbs in cross-linguistic perspective [Review article of Haspelmath and König (eds.), *Converbs*, Berlin: Mouton de Gruyter, 1995]. *Linguistic Typology* 2: 381–397.

Comrie, Bernard

- 1998 Attributive clauses in Asian languages: Towards an areal typology. In: Winfried BOEDER et al. (eds.), *Sprach in Raum und Zeit: In Memoriam Johannes Bechert*, Band 2: 19–37. Tübingen: Günter Narr.

一ノ瀬 恵

- 1992 「モンゴル語の語構成における非接尾辞的手法: 北方の接尾辞型諸言語との対照をつうじて」 宮岡伯人 (編) 『北の言語: 類型と歴史』 東京: 三省堂.

Ikegami, Jiro

- 1968 The Oroch third person pronoun *nooni*. *Ural-Altaische Jahrbücher* 40/1&2: 82–84.

池上 二良

- 2001 「樺太のウイリタ語の感嘆・疑問その他の語尾について」 『ツングース語研究』 東京: 汲古書院. [初出 1991 『北海道方言研究会20周年記念論文集 ことばの世界』 158-167, 札幌: 北海道方言研究会.]

Johns, Alana

- 1987 *Transitivity and Grammatical Relations in Inuktitut*. Doctoral dissertation, University of Ottawa.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）

- 1996 『言語学大辞典』第6巻 術語編. 東京：三省堂.

風間伸次郎

- 2002 「ツングース諸語における「使役」を示す形式について」『環北太平洋の言語』8: 37-50. 文部科学省特定領域研究(A) 環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 報告書A2-012.
- 2003 「アルタイ諸言語の3グループ(チュルク・モンゴル・ツングース) 及び朝鮮語. 日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (共編) 『日本語系統論の現在』日文研叢書31: 249-340, 京都：国際日本文化研究センター.
- 2007 「ツングース諸語の三人称代名詞について」大東文化大学語学教育研究所(編) 『語学教育フォーラム』13: 173-184.
- 2010 「ツングース諸語における統合度について」呉人恵 (編) 『環北太平洋の言語』15: 71-83.

河野六郎

- 1989 「I) 日本語の特質」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第2巻: 1574-1588. 東京：三省堂.

宮岡伯人

- 1988 「エスキモー語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第1巻: 896-910. 東京：三省堂.

Miyaoka, Osahito

- 2012 *A Grammar of Central Alaskan Yupik*. Mouton Grammar Library 58. Berlin: Mouton de Gruyter.

永井忠孝

- 2003 「エスキモーの最大グループ イヌイト／イヌピアック」津曲敏郎（編著）『北のことば フィールド・ノート [18の言語と文化] 』: 163-175. 札幌：北海道大学図書刊行会.

大江孝男

- 1988 「アルタイ諸言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第1巻: 528-545. 東京：三省堂.

大島稔

- 1988 「アリュート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第1巻: 508-516. 東京：三省堂.

小澤重男

1997 『蒙古語文語文法講義』 東京：大学書林.

Sapir, Edward

1921 *Language: An introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace & World, Inc., New York.

梅谷博之

2008 『モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の構文』 博士論文. 東京大学.

On the Similarities and Differences between the Mongol, Tungusic, and Eskimo Languages

Shinjiro KAZAMA

Tokyo University of Foreign Studies

This paper is an attempt at a contrastive typological analysis of selected structural features of two languages and one language family: Mongol(here exemplified by Khalkha Mongolian), Tungusic and Eskimo (here exemplified by Central Alaskan Yupik). While Mongol and Tungusic, together with Japanese (Japonic) and Korean (Koreanic), are known to share many structural features in the context of the Altaic phenomenon, many of these features are not particularly diagnostic and might even be regarded as coincidental with perhaps the single exception of obviative person marking. This is a feature attested also in Eskimo. The present paper offers a somewhat more detailed discussion of this, as well as other typological similarities and differences between the three language families in the areal context of the North Pacific region.

It may be concluded that the Eskimo language shares a number of important typological properties with Mongol and Tungusic (as well as with the other languages of the Altaic type). Some of the similarities, like the obviative person system and the switch reference uses of causative constructions, are rather specific and potentially diagnostic in the context of areal typology. Other similarities, like the systems of non-finite verbal forms (participles and converbs) and the presence of locational nouns (spatials) are perhaps less significant and may be explained by universal tendencies of linguistic structures.

Since the present paper is only a first draft on the topic, it makes no claim of being an exhaustive typological analysis of the three languages. A more comprehensive treatment would necessarily require the consideration of the internal variation within each language group (the different Mongolic, Tungusic and Eskimo-Aleut languages) as well as their neighbors in Northeast Asia (especially Nivkh, Yukaghir, and Chukchi-Kamchatkan). The historical background of each language group should also be examined in greater detail. Only after these steps, will it be possible to proceed towards understanding the reasons behind the typological similarities and differences discussed above.